

昭和の南海地震体験談

氏名:外裏 實(そとうら みのる)
生年月日:昭和8年6月28日
地震を体験した場所:新宮市
当時の家族状況:父、母、兄、姉、弟



1)地震発生時の状況

終戦後の昭和20年9月頃、当時で韓国から内地に引き上げて来た。12歳(小学校6年生)の時だった。

10月頃、典型的な町屋だった当地に落ち着き、2ヶ月程経ったときに地震があった。

当日家には両親と兄、姉、弟がおり、揺ったあと母親に弟と一緒に抱きかかえられながら、表に出てうずくまった。近所の人たちも皆外に飛び出してきた。外は寒く、しばらくして家に入った。

2)津波襲来時の状況

そのとき、津波があったことも、地震の後、津波が来るという感覚も全く持ちあわせてなかった。

3)家族の行動・被害

真っ先に外に飛び出した父親の頭に家の屋根から落ちてきた瓦が当たった。かなり出血していたが、たいしたことはなかった。

夜が明けてから2人くらいのグループで看護婦さんが「怪我をした人いませんか」とまわってきてくれ、父は治療を受けていた。

屋根も手直したくらいで、葺き替えまではしなかったはずである。

4)集落・周囲の被害

通り(当時、八咫烏町)には被害家屋は1件もなかったと思われる。

夜が明けて、近所の人たちがわいわいと騒ぎだしていた。子供心に火事があったとか色々話を聞くと珍しく、仲ノ町が大変だということで午前中に近所の子供たちと走って、現在のオークワ新宮店のあたりまで見に行った。行ってみると地震で仲ノ町全体がべしゃんこになっていた。



現在の仲ノ町商店街

仲ノ町は戦災による被害が全く受けず、昔の木造家屋がズラッと並んでいた。現在のようになりっぱな通りではなく、道も狭かった。それがその通りにぺしゃんと倒れていた。

そのあと、火事があったのは昼頃で、仲ノ町が燃えているということで、その界隈の人たちが家財道具を運び出していた。現在の船町の川原の下は、運び出された家財道具で一杯だった。火を消すことが出来ないのも、炎症が怖かった筈である。

現在 NTT の空き地(新町3丁目)になっているところに、当時公会堂があった。そこから丹鶴町までの火を喰い止める目的で、その建物をダイナマイトで爆破する瞬間を目のあたりにした。ドカーンと音がした割には、建物は倒れて行かなかった。それが功を奏したかはわからないが、そこから丹鶴町寄りには焼けていない。仲ノ町商店街を中心にして、川原側(新町あたり)までは焼けてしまった。とにかくその火事は凄かった。

消化活動がどのように行われていたかまでは覚えていない。その時、赤い消防車というものも見たことはない。バケツで消化していたのか？...

翌日もよく燃えており、仲ノ町が全部焼け落ちてから火は治まった。

仲ノ町一帯が火災に見舞われただけで、それ以外に火は広がっていないと思う。ただ他の地区で倒壊した家屋はあったと思うが...

火災も自宅周辺から見たのは、あちこちで火の手が上がっているのではなく、どこか一箇所火が上がって、迫ってきているという状態だった。

5)地震・津波後の生活

仲ノ町は新宮の代表的な商店街で紀南でも有名だったことから復興も早かった。ぺしゃんと潰れたので立て直すしか方法がなかった。

終戦後のごったごったの時期だったので、食べるものも少なく常に空腹感を感じていた。少なくとも昭和25～26年まではそうだった。

6)次の災害への備え

やはり地震で怖いのは火事ではないだろうか。津波の怖さはあまりよくわからない。

自宅周辺は被害がなかったのも、地盤が強いんだなと実感している反面、平成18年に建て替えをした際、地震の強度対策だけは建築上、入念に講じている。